慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企 能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

新塾長および常任理事が決まる
医学部より戸山病院長が選任される

二〇〇九年五月二十八日付けで、清家篤塾長が就任した。それに伴い、八人の常任理事の就任も発表された。その氏名および担当業務は次の通りである。なお、今回発表された常任理事には、三四会員より戸山芳昭病院長も選任されている。戸山病院長からは、病院、病院経営改革担当として新体制のもとでどのような舵取りを行っていくのか、抱負を寄せてもらった。

塾長
清家　篤（せいけ　あつし）
54年生まれ。78年経済学部卒業。商学部教授
学校法人慶應義塾理事長　兼　慶應義塾大学長

常任理事と担当業務

長谷山　彰（はせやま　あきら）
52年生まれ。75年法学部卒業、79年文学部卒業。文学部教授
【担当】教育（主管）、研究（共管）、学生、一貫教育校（主管）、施設・管理（主管）、三田・日吉キャンパス

真壁　利明（まかべ　としあき）
47年生まれ。70年工学部卒業。理工学部教授
【担当】研究（主管）、教育（共管）、産学連携、IT、矢上キャンパス

清水　雅彦（しみず　まさひこ）
44年生まれ。68年経済学部卒業。経済学部教授
【担当】財務・経理、経営改革（主管）、病院経営改革（共管）、施設・管理（共管）

井田　良（いだ　まこと）
56年生まれ。78年法学部卒業。法学部教授
【担当】総務・法務、広報、塾員（主管）、調達、企画、育林会、危機管理、研究（共管）、教育（共管）

渡部　直樹（わたなべ　なおき）
49年生まれ。72年商学部卒業。商学部教授
【担当】人事・労務、経営改革（共管）、人事給与制度改革、個人情報保護、創立百五十年記念事業、社会・地域連携、男女共同参画、体育会、点検・評価

戸山　芳昭（とやま　よしあき）
50年生まれ。75年医学部卒業。医学部教授
【担当】病院、病院経営改革（主管）、経営改革（共管）、教育（共管）、信濃町キャンパス

阿川　尚之（あがわ　なおゆき）
51年生まれ。77年ジョージタウン大学外交政策学部卒業。総合政策学部教授
【担当】国際、教育（共管）、塾員（共管）、一貫教育校（共管）、湘南藤沢キャンパス

笠原　忠（かさはら　ただし）
48年生まれ。72年東京大学薬学部卒業。薬学部教授
【担当】教育（共管）、病院経営改革（共管）、芝共立キャンパス

慶應義塾常任理事就任にあたって

病院長　**戸山　芳昭**（54回）

慶應義塾は今年四月に塾長選挙が行われ、既にご承知の通り安西体制から清家体制へと移行致しました。正確には五月二十八日より四年間、前商学部長であった清家篤氏が慶應義塾の全ての教育・研究・医療等の運営や企画、そして人事から経営までの総責任者として塾長を務め、その塾長を支える常任理事八名の一人として私が指名を受けました。大変光栄なことですが、私にとっては全く想定外のことであり、ましてや極めて大きな責任を有する常任理事の職務を私が務められるのか、相応しいのか、責任を全うできるのか…、清家塾長に打診されてから大いに悩みました。しかし、平成十九年十月から病院長を務めさせて頂き、安西前塾長が自らリーダーとなって立ち上げてくれた「信濃町キャンパス改革・刷新プロジェクト」四分野の中の「新病院棟・予防医療センター（仮称）の建設・整備・機能関係、新規収益事業、および資金手当に関する基本構想WG」の委員長を私が仰せつかり、教授会も含め、WGを中心に何回も協議し、予防医療センター・臨床研究棟II（二〇一一年竣工予定）と新病院棟の建設（二〇一五年竣工予定）に向け動き始めました。是も偏に「世界に冠たる大学病院」構築に向け先導してくれた安西前塾長の強いリーダーシップによるものであり、ここで本誌上をお借りし改めて安西氏に対し感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。私共は信濃町キャンパスに対する安西前塾長の意思を引き継ぎ、病院経営を含めた信濃町の改革刷新と新病院棟建設を何としても実現しなくてはなりません。幸いにも、本プロジェクトは義塾創立百五十年記念事業の一環として承認を頂きましたが、老朽化した中央棟や1号・2号・6号・7号棟は記念事業の一環でなくても建替えが必要な時期、状況にあります。そこで、医学部・病院、三四会の先生方の悲願、総意である新病院棟建設を一日も早く実現させるためにも、信濃町にとって極めて大切なこの時期に塾執行部に入れて頂くことは重要であると判断し理事就任を決断した次第です。末松医学部長とは二人三脚で、可能な限り信濃町キャンパスの改革、運営に積極的に取り組んでまいりましたが、今後も医学部と病院が一体となって新病院棟建設に向け努力していくことは重要であり、塾執行部には強くアピールしていきたいと思います。

その反面、我々は医学部・病院に科せられた課題をしっかり果していく責任もあります。塾広報部からの報告によれば、世界的金融危機等に慶應も飲み込まれ、平成二十年度決算は二百六十九億円の赤字となっております。このように慶應は極めて厳しい財政状況に置かれていますが、信濃町はしっかり経営基盤を立て直して少しでも義塾全体の収支改善に協力し、最先端の高度医療を提供すると共に、基礎・臨床の素晴らしい業績を世界に向け発信していくことが責務と考えます。理事は当然ながら義塾全体のことを考え行動する必要があり、信濃町の利益のみを求めることは出来ません。このあたりを皆さんには十分ご理解頂き、新病院棟建設に向けて引き続きのご支援、ご協力を賜りますようお願いする次第です。

私が理事として担当する職務は、信濃町キャンパス・病院・病院経営改革（主管）・経営改革（共管）・教育（共管）・保健管理センター・月ケ瀬リハセンター・診療所・スポーツ医学研究センターであります。今、慶應も含め日本の医療は多くの課題が山積し、大きな曲がり角にあるようです。そんな中で信濃町キャンパスは、予防医療センター・臨床研究棟・新病院棟建設というハード面に加え、卒前・卒後教育の見直し、各診療科・看護部・薬剤部・検査部等を含めた新たな体制作り、救急医療・総合危機管理体制の構築、優れた基礎・臨床医の養成、臨床研究・高度先進医療や国際化・国際交流の推進などソフト面の充実を図る必要があります。その上で、基礎では国際的基礎医学研究拠点の構築、臨床ではアジアの中心的臨床拠点病院の構築を目指したいと考えております。

そのためにも、医学部創立百年に当たる二〇一七年時までには新病院棟を建設し、医学部・薬学部・看護医療学部が一体となり、基礎医学と予防医学、臨床医学が融合した信濃町キャンパスを作り上げる必要があります。どうか信濃町の教職員の方々はもとより、義塾そして三四会の皆様方にも多方面に亘るご理解とご支援、ご協力の程をお願いする次第です。この四年間の理事として与えられた職責を全うすべく、精一杯努力する所存です。「世界に冠たる大学病院を目指して」、そして「慶應医学、次の百年に向けて、輝く未来に向けて……」。

第78回 北里記念式典挙行

北里賞　三浦　正幸（生61相当）東京大学大学院薬学系研究科遺伝学教室教授「プログラム細胞死シグナルの遺伝学的解明」

北島賞　横山　顕（内64回）国立病院機構久里浜アルコール症センター臨床研究部長「飲酒関連食道・頭頸部の危険因子と予防に関する研究」

北島賞　田邊　稔（外64回）外科学教室准教授「ABO血液型不適合肝移植における抗体関連拒絶反応の制御法に関する研究」

清家篤塾長

今年度受賞者たち
（左から三浦正幸氏、横山顕氏、田邊稔氏）

六月十二日午後一時より第七十八回北里記念式典が北里講堂で行われた。北里記念式典は初代医学部長である北里柴三郎先生のご功績を称え、ご命日の前日である毎年六月十二日に行われている。来賓として北里柴三郎先生のご令孫であり明治製菓株式会社最高顧問の北里一郎氏、北里研究所理事長／学長・柴忠義氏、同常任理事・石館武夫氏、同常任理事・土本寛二氏、同理事／北里研究所獣医学部長・伊藤伸彦氏、同理事／北里大学東病院長・菊池史郎氏、同理事水本清久氏が出席された。

義塾からは清家篤塾長、末松誠医学部長、戸山芳昭常任理事、吉野肇一三四会副会長、村井勝三四会副会長、武田純三医学部長補佐、福田恵一医学部長補佐らが来賓を迎えた。はじめに一同北里柴三郎先生への黙祷を行ったあと、清家塾長より挨拶がなされた。清家塾長は北里先生の説いた『叡智と実践』と福澤諭吉先生の掲げた『実学の精神』という二つの言葉を挙げ、また自身の専門である労働経済学も交えて学問の社会貢献の重要性を説き、その実践を成した受賞者を礼賛した。続いて末松医学部長の挨拶では、北里柴三郎先生が一八八九年に破傷風菌の純粋培養に成功したことに言及し、この一二〇年目という節目の年に北里先生と同じく医学の進歩に貢献した受賞者を称えた。また吉野肇一三四会副会長からは福澤先生の好んだ「いよいよ究めて、いよいよ遠し」の言葉を交えた挨拶がなされ、受賞者達の更なる活躍を奨励した。続いて北里一郎氏は、伝染病予防法制定後に北里先生が述べたという『医学は日進月歩、新たな医学の実践は医学者の責務である』という思想を引き、今回の受賞はまさに医学の実践であるとの賞賛の言葉を述べた。

その後、村井勝三四会副会長から北里賞一名、北島賞二名の授与が行われ、引き続いて受賞者による受賞テーマに関わる講演が行われ、無事閉式となった。

国際シンポジウム開催
「科学・技術を通じたグローバル社会への貢献：大学院教育の役割」

六月二日、GCOE（ヒト代謝システム生物学）主催の国際シンポジウムが三田で開催された。テーマは、人類そして地球全体にとって二十一世紀をより快適にするためには科学はどう進歩すべきか？グローバル社会に生きるとはどういうことか？そのために高等教育は何を目指すべきか？という医学・医療の領域を超えたかなり大きなものとなった。慶應内外から五人の著名な講師の先生方をお招きし、上記テーマに関して自由に語っていただいた。

会場にはGCOE関係者のみならず、駐日ルワンダ共和国大使や三四会会員を始め、多くの学部学生が詰め寄った。真壁利明常任理事（理工学部）による開会のご挨拶の後、司会から「医学部の国際交流の現状と今後の展開」に関して簡単な紹介があった。特にカロリンスカ研究所との単位互換性やダブルディグリーに向けた取り組みは注目を集めた。

ノーベル賞学者のPeter Agre博士（ジョンズホプキンス大学）

原丈人氏（法学部卒、デフタパートナーズ会長）

最初の演者、SFCの金子郁容研究科委員長には、「コ・モビリティ社会の構築に向けて」という演題で、ITやエコ技術がいかに地域社会や高齢化社会を活性化していくか、分かりやすく説明いただいた。青森市をモデルとした今後の取り組みが楽しみである。

次に阿川尚之常任理事（SFC）に「インフルエンザとオバマ大統領　危機の到来とアメリカ憲法」という演題でお話しいただいた。アメリカ憲法に裏づけされた大統領の強力なパワーが、現在多くの問題を抱えているアメリカ自身や今後起こりうるグローバル社会の危機に対してどう働きかけていくか？今後の動向が注目された。

左から、末松誠医学部長、金子郁容研究科委員長、Peter Agre博士、阿川尚之常任理事、安井正人医学部教授

そして、三四会会員、芦刈ロイ・ヒロユキ先生（ニューヨーク在住　37回）が「アメリカで過ごした私の半世紀」という演題で、ご自身の体験談を熱く語ってくださった。芦刈先生には、医学部六年生のアメリカ短期留学に対して多大なご理解ご協力をいただいている。先生ご自身の五十年間に渡る米国でのご苦労やご活躍のお話は、これから米国留学を目指そうとしている若い学生や研究者一人一人の胸に深く刻まれたことと思う。そして、そのご苦労を経て行き着いたところは、福澤諭吉先生の「独立自尊」のお考えだった、というお話は大変印象的だった。また、最後に若い学生達に向けて、「英語をしっかり勉強しなさい」「自分の力で外にでてチャレンジしなさい」という力強いメッセージをいただいた。

コーヒーブレークでの自由討議を挟み、原丈人氏（法学部卒、デフタパートナーズ会長）が「二十一世紀の国富論」というテーマでポストコンピューター、ポスト資本主義のあり方に関して、独自の考えや取り組みを話してくださった。原氏は、日本政府、米国政府そして国連の要人として幅広く活躍されている。原氏が実際に取り組んでおられるIT事業（特に教育・医療）を介したバングラディッシュへの支援やスピルリナという高タンパク質含有植物栽培を介したアフリカ諸国への支援は、今後の発展途上国への協力を考えていく上でとても参考になった。原氏から学生へのメッセージは、「できれば学生時代にアフリカやアジアの途上国へ実際に行ってみてほしい。きっとその後の人生が変わると思う」というものであった。現在、医学部には、「米国夏期短期留学プログラム」「IMA」「日中医学生交流会」「日韓医学生交流会」などを介して、学生が海外に出て行く機会が設けられているが、今後は是非、アフリカ、バングラディッシュなどにも出向いていく機会を作っていきたいと思う。

最後は、GCOEのメンバーでもあり、ノーベル賞学者のPeter Agre博士（ジョンズホプキンス大学）に、「科学と外交」という興味深いテーマでお話いただいた。科学の更なる発展やそれによる社会貢献のために、今後の国際関係や国際協力がどうあるべきか、博士自らの考えを語ってもらった。「先のことは誰にも分からない。多少のリスクを冒してでも世界に出てチャレンジしてもらいたい」という熱いメッセージは、しっかりと若い聴衆者たちの胸に届いたことと思う。締めくくりは、本GCOE拠点リーダーでもある末松誠医学部長にご挨拶いただいた。「我々研究者は、とかく研究室の中に閉じこもりがちであるが、できるだけ外にも目を向ける機会を増やしていただきたい。本日のシンポジウムでは私自身も含めとても良い刺激を受けたことと思う」と、力強く語ってくださった。

レセプションでは、参加した学生や研究者たちもAgre教授らと親しく交流する機会も得ることができ、彼らの中に世界で活躍したいというモチベーションが更に高まったのではないかと感じている。このシンポジウムをきっかけに、若い学生達が自らのプロジェクトに専心しながらも広い視野をもってチャレンジを続け、様々な分野の第一人者から良い刺激を受けることで、超一流の医師や研究者として羽ばたいていくことを心から願っている。

安井　正人（シンポジウム司会、国際交流委員会委員長、68回）

特別寄稿
H1N1インフルエンザ・アウトブレークを通して考える

WHO本部事務局長補　**中谷　比呂樹**（56回）

今回のアウトブレークが最初に認知された時、マーガレット・チャンWHO事務局長と私は、別ルートで空路、米国ワシントンへ向かっていました。翌四月二十四日に開催される世界マラリア・デー記念大会出席の為です。夜遅くに到着し、翌日に備えて早めに就寝したところ未明に携帯端末へのメールの着信音で目が覚めました。本部にある自分のPCへのメールはすべて携帯端末に転送され、一日二十四時間メールが入ってくるのです。開けて見るとメキシコで多くの感染者と死亡者が出ておりWHO感染症部門は特別危機管理室を立ち上げたとのこと。早速、事務局長付きの秘書官と連絡して早朝からの対応となりました。「自分は、一番早い飛行機で本部に戻り、直に緊急会議を招集する。中谷ADGは、当初予定のマラリア会議を円滑に進めたのち、出来るだけ早く帰任せよ」との指示を受け慌ただしい一カ月が始まったのです。

リオで行われた世界結核大会にて、結核部の仲間と

その後の経緯については新聞報道などで三四会員の皆様はよくご存じのことと思いますので今回のアウトブレークの意味するものを述べてみたいと思います。

最近の国際保健分野は、大きく様変わりしてプレーヤーも、資金量でも、そしてカバーする範囲も、さらには国際政治での位置づけも「地殻変動」というべき大変革が起こっていました。このような新しい枠組みの中で日本が、あるいは、私の立場でいえば、WHOがどういうポジションを占めるか悩んでいたところに今回のアウトブレークです。WHOという世界の公共機関の役割が見直されたといっては言いすぎでしょうか。

実は、公衆衛生の役割は、生命の危機を強制力を伴っても守るという強権的な側面と、健康の増進を促すというソフトな側面があると思うのです。新型インフルエンザやSARSなどの新興感染症や「食の安全」といった分野は、まさに、前者の典型例で、冷戦終了・ポスト9・11同時多発テロ後の安全保障の観点から問題にもなっていたわけです。そして各国は、健康危機管理の一環としてそれなりの準備をしてきたことが今回の対応の基盤になっています。

ソフトな面では、私の担当しているエイズ・結核・感染症分野では、途上国での治療カバー率が向上し、エイズでは三割、結核では七割に近づかんとしています。これらは、一見、別々の様ですが、共通基盤にはさまざまな地球規模での健康問題に『連帯感』をもって立ち向かうとの価値観の共有があると思います。そこで、このような国際社会共通の課題に対して処方箋を提言し発信する能力があるかが二十一世紀においてその国あるいは機関が国際社会においてどれだけの影響力をもつことになるかということの新たなパワーあるいは品格のバロメーターになってきていると感じました。

今回のインフルエンザ問題では多くの塾員・三四会員が国際社会で関わっています。特に、塾員の在ジュネーブ日本政府代表部北島信一大使、WHOアジア太平洋地域事務局感染症課長（在マニラ）の葛西健君（69回）が大活躍をされています。

鑑往知来

私事で恐縮だが、昨年医学教育担当の部署に異動して改めて気づいたのは、医学部の先生方が学生の教育に大変な情熱と時間を割いていることである。医学教育モデルコアカリキュラムの作成と実施、五年進級時の共用試験の制度化など、この十年ほどの医学教育の改善は著しく、大学の教育スタッフの努力には著しいものがある。

医学部教職員の仕事は、教育・研究・診療の三つといわれるが、近年の病院経営難も加わり、教育・診療部分が大きくなり、研究に専念できる時間が少なくなったとする関係者の声を聞く。ある調査によると全国の医学部長等の八割は研究時間が減少し、七割は診療時間が増加したとしている（平成二十年）。

一方で、臨床実習時間の大学間バラツキ（多い大学は二千時間を超えるのに、少ないところは五百時間以下）、PBL（臨床課題の自己解決型学習）など多人数教員が必要な教育の増加といった現状もある。

もちろん、この背景には高等教育費や医療費といった大きな課題もあるが、この際、具体的な教育方法についても一考すべきとの意見も強い。「イギリスなどでは診療所の医師が大学における臨床実習の学生教育に来て欲しい、と困るほど依頼される。日本でも病院はもちろん、診療所の医師にもっと学生教育に協力してもらえないのか」といった指摘である。

学部学生に大学以外の医療機関の経験が豊富な医師による教育が有意義であるのは当然であるが、さらに、学生への教育は教える側にとっても新鮮な経験となると積極的に評価する関係者も多いようである。

実行のためには一般医療機関の医師が、日常診療の合間に最新の教育内容や方法論に接することができる仕組みも必要となろう。医学・医療への国民の期待の高さに緊張するこのごろである。よき医療人を育てるため、読者先生方のご尽力に心から期待するものである。

（文部科学省医学教育課長　新木一弘　64回）